

和歌(短歌)の表現技法

― 古今歌における「減らない二句切れ」・「増える三句切れ」と
中実構成との関連(因果関係) ― に関する一考察

浅岡 純朗



はじめに

(一) 「中実」構成の定義

古今和歌集の和歌(短歌)(以下「古今歌」という。)にしばしば現われる外形的特色の一つとして、中実(歌学用語)とは、

「歌の主題となる名詞を第三句に置くこと。」(注1)、とある。

また、小林和彦氏(注2)は、次の例歌を示し、

・ よそにのみあはれとぞ見し梅花あかぬいろかは折りてなりけり

・ (巻第一・春歌上・三七・素性法師)

「平安初期に好まれた歌格で、中実の語(「梅花」を指す。筆者注)が上
下にかかる構成をもち、属性が大きい。五七調から七五調へ移行する過渡
的な姿を見せている。」と解説している。

(二) 「句切れ」の定義

句切れ(歌学用語)とは、「複数の文からなる短歌で、結句(第五句)以外の何句目で文が終わっているかを示すもの。その位置によって、初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れという。『万葉集』の時代は二句切れ・四句切れが、『古今和歌集』の時代は三句切れが、『新古今和歌集』の時代は初句切れ・三句切れが比較的多い。(後略)」(注3)、とある。

筆者も先行研究(注6)で、詠歌年代が明らかかな万葉歌二〇九五首、及び古今歌一〇九一首における句切れの詳細について調べたことがある。

句切れ歌と無句切れ歌の割合は、万葉歌では七七〇首・37%対一三二五首63%、古今歌では四二一首・38%対六八〇首・62%とさして差異はない。また、②初句から結句までの句と句とのつなぎ目のうち切れ目となるものは、万葉歌では八三五回・10%、古今歌では四六一回・11%と、これもさして差異はない。万葉歌、古今歌ともに、句切れ歌の首数でも句切れの頻度でも、全体として、大きな差異はないこととなる。

一 古今歌の「減らない二句切れ」と中実構成との関連(因果関係)

(一) 古今歌における二句切れと中実構成とのつながりを示す例歌をいくつか挙げてみる。

・ 人の見る事「係り結び」二句切れやくるしき「係り結び」二句切れをみなへし秋ぎりにのみたちかくるらむ

(巻第四・秋歌上・二三五・ただみね*壬生忠岑。筆者注)

(口語訳) (をみなへしハ) 人から見られるのがつらいのだろうか。それで (をみなへしハ) 秋霧の中に隠れてばかりいるのだろう。

(説明) 中実構成の「をみなへし」は、上二句に対しては述部が倒置した一つの短文表現(※1)の主語としてかかり、下二句に対してはそのまま主語としてかかるから、文法的には二句切れは認められても、三句切れは認められない。

・心あてにをらば 「係り結び」二句切れ やをらむ 「係り結び」二句切れ はつしものおきまどはせる白菊の花

(巻第五・秋歌下・二七七・凡河内みつね・躬恒。筆者注)

(口語訳) 当て推量に折るなら折り取ることもできようか。初霜が一面に白く置いて(私ヲ) まどわせる、白菊の花は。

(説明) この歌は、「初霜が置イタ白菊ノ花ハ心アテニ折ツタナラ折ルカモシレナイ」という含意の長文表現(※2)の述部が倒置されたものである。二句切れは認められるが、初霜の「白」と白菊の「白」の共通性はあっても、中実構成としての「初霜」は認め難い。

ここで、「中実」構成の定義にある「歌の主題」とは何を意味するか、検討してみたい。

・春たてば花と 「係り結び」二句切れ や見らむ 「係り結び」二句切れ 白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく(巻

第一・春歌上・六・素性法師)

(口語訳) 春になったので、(鶯ハ白雪ヲ) 花でも思っているのだろうか。(白雪ノ) 降りかかっている(梅ノ) 枝で(鶯ガ) あんなに鳴いて

いるよ。

この歌の主題は、鳴いている「鶯」なのか、鶯が花と思った「白雪」なのか、いまひとつ判然としない。前者とするなら第三句に「鶯」の語句がないから中実構成とならない。後者とするなら第三句に「白雪ノ」の語句があるから中実構成を認めてよいことになる。このように、鑑賞者の解釈如何で結論が変わる定義は厳密さを欠き、よろしくない。

(二) 別表1及び2によれば、①万葉歌の二句切れは、句切れ計八三五回中三六五回・44%、うち短文表現三一一回・37%、長文(述部の倒置)表現三〇回・4%、呼びかけ表現二四回・3%のところ、②古今歌の二句切れは、句切れ計四六一回中一九九回・43%、うち短文表現一四六回・32%、長文(述部の倒置)表現二七回・6%、呼びかけ表現二六回・6%とあるので、短文表現の5%減少を呼びかけ表現の3%増加と長文表現の2%増加をもって埋め合わせ、「減らない二句切れ」を実現したことになる。

他方、古今歌の二句切れに含まれる中実構成は六〇回・13%、その内訳を表現区分別に見ると、短文表現四〇回・9%、長文表現一一回・2%、呼びかけ表現九回・2%となる。別の言い方をすれば、古今歌の二句切れにおいては、短文表現で中実構成を伴うもの四〇回・9%という新たな関与がありつつも5%の減少、長文表現・呼びかけ表現合わせて二〇回・4%という新たな関与が加わっても、二句切れ全体としては1%減少の一九九

回・43%に止まらざるを得なかった、ということになる。繰り返しになるかもしれないが、短文表現9%、長文表現・呼びかけ表現合わせて4%の割合に比例して、「二句切れ+中実構成」の類歌を掲げておく。

※1 短文とは、短歌の一句以上四句以下の長さのひと続きの核文をいう。

※2 長文とは、短歌一首の長さのひと続きの核文をいう。

(三) 古今歌における二句切れ+中実構成の類歌

① 短文表現の類歌五首

・ 折りつれば袖 「係り結び」二句切れ こそにほへ 梅花有りとやここにうぐひすのなく

(巻第一・春歌上・三二・よみ人しらず)

(口語訳) (梅花ヲ) 折り取ったので(私ノ) 袖がかおっているのだ。

(梅花ガ) ここに咲いていると思っっているのか、(鶯ガ) 鳴いていることよ。

(説明) この歌では、上二句の短文の目的語(梅花ヲ)を第三句に置き、

下二句の主語の一つとして「梅花ガ」が第三句に置かれた、と見るべきだから、二句切れ+中実構成は認められるが、下三句は「梅花ガ」が主語の一つとして文を構成しているので、三句切れは認められない。

・ 君ならで誰にか見せむ 「係り結び」二句切れ 梅花色をもかをもしる人ぞしる(巻第一・

春歌上・三八・とものり*紀友則。筆者注)

(説明) 第三句「梅花」は(梅花ハ)と上二句の短文の主語として倒置的にかかり第二句は「かーむ」の係り結びとして文が終わっているの

二句切れが、下二句の短文に対しては(梅花ノ)と連体的かつ上下にかかっているから中実構成が、それぞれ認められるが、三句切れは認められない。

・ かきくらしことはふらなむ 二句切れ 春雨にぬれぎぬきせて君をとどめむ

(巻第八・離別歌・四〇二・よみ人しらず)

(口語訳) (春雨ヨ)。(注5) どうせ同じことなら、空をかき暗くして

ひどく降ってほしいものだ。(春雨ニ) 無実の罪を負わせ、(私ハ) あなたをいつまでもとどめておこう。

(説明) 上二句の呼びかけの対象(主語)は「春雨ヨ」、下三句の短文

は「春雨のせいにして(私ハ)」の主語が省略されているが、歌の主題としては「春雨」であることは疑義がないから、二句切れ+中実構成が認められよう。ただし、「春雨ニ」は文が終わらず次句につながっているの

呼びかけ表現ながら三句切れは認められない。

・ あさみ 「係り結び」二句切れ こそ袖はひつらめ 涙河身さへ流がるときかばたのまむ

(巻第一三・恋歌・六一八・なりひらの朝臣*在原業平。筆者注)

(口語訳) 「(涙河ガ) 浅イカラコソ」袖がぬれたにちがいない。「(涙河ガ) 深くナリ、アナタノ」身体まで流れたと聞けば、(私ハ) あなたを信用しましょう。

(説明) 上二句の短文の主語は「涙河ノ浅ミ」となるから、上の句の短文は主語「浅ミ」に連体修飾語としてかかる「涙河ノ」が倒置されて、

第三句に収まったものと考えられる。下の句の短文の主語の一つは「涙河ノ深ミ」と想定できるから、この例歌も、二句切れ＋中実構成は認められるが、三句切れは認められない。

・ そこひなきふち 「係り結び」二句切れ やはさわぐ 山河のあさきせにこそあだなみはた

て(巻第一四・恋歌四・七二二・そせい法師*素性法師。筆者注)

(口語訳) 底知れない(山河ノ) 測は音をたててざわつくことがあろうか。(山河ノ) 浅い瀬にこそ徒波(アダナミ)。いたずらに立ち騒ぐ波のこど。多くは、変わりやすい人の心やむなしい色恋のうわさのたとえとなる。) は立つものなのだ。

(説明) 上三句の短文は「そこひなきふち」が主語で、述語「やはさわぐ」の係り結びで文が終わっているので、まずは二句切れが認められる。第三句以下では「山河のあさき瀬」に立つ「あだなみ」が主語で、確かに「山河の」は上二句と下二句に共通する語句ではあるものの、これを歌の主語とするには、いささかの疑義がある。

② 長文(述部の倒置) 表現一首

・ かつこえてわかれもゆくか 二句切れ あふさかは人だのめなる名にこそあ

りけれ(巻第八・離別歌・三九〇・つらゆき*紀貫之。筆者注)

(口語訳) (逢坂トハ人ガ逢ウ坂ダト思ツテイタノニ) 一方では、(アナタハ私ヲ振り切ツテ) 別れていくのか。(逢坂トハ) 人にむなしい期待をさせる名前だったということよ。

(説明) 「逢坂の関」は、滋賀県大津市にある逢坂山に設けられた関所のことで、いわゆる三関の一つ。大化二(六四六)年に設置されたが、平安遷都の頃に廃止された。逢坂の関は都との別れの場所ではあったが、逆に、都へ帰ってくる人々にとっては出会いの場所ともなった。この歌の上二句の短文は、「逢坂トイウ名前ニモカカワラズ」、一方では別れていくか、という含意として潜在するだけで、第三句の「あふさかは」という語句は下二句の短文の主語としてのみ用いられているように見える。したがって、第三句に置かれた「あふさかは」が中実構成として認められるかどうか、いささかの疑義がある。

③ 呼びかけ表現一首

・ 名にめでてをれるばかりぞ 二句切れ をみなへし 三句切れ 我おちにきと人にか

たるな(巻第四・秋歌上・二二六・僧正へんぜう*僧正遍照。筆者注)

(口語訳) (をみなへしトイウ植物) 名にひかれて折ってみただけなのだ。女郎花ヨ。(私ガをみなニ) 迷って墮落したなどと人にしゃべらないでくれ。

(説明) 上二句の短文は、「(私ガ女郎花トイウ植物) 名ニヒカレテ」を含意として、「をれるばかりぞ」と断定の終助詞で文が終わっている。まず、二句切れが認められる。次に、下二句の短文は、第三句に置かれている「をみなへし」に対する呼びかけの内容を有している。下三句は独立した呼びかけ表現となっている。そうすると、第三句は「をみなへし

ヨ。」と口語訳できるから、三句切れも認めることができる。すなわち、「をみなへし」を中実とする二句切れ＋中実構成＋三句切れ、という珍しい構文の発生ということが出来る。

二 古今歌の「増える三句切れ」と中実構成との関連 (因果関係)

(一) 古今歌における三句切れと中実構成とのつながりを示す例歌をいくつか挙げてみる。

・ をりとらばをしげにもあるか 二句切れ 桜花 三句切れ いざやどかりてちるまで

は 見 む (巻第一・春歌上・六五・よみ人しらず)

(口語訳) (桜花ハ) 折りとったなら惜しげに思われたことだ。(桜花ヨ。)

さあ、ここに宿を借りて、散るまで眺めよう。

(説明) この歌の上二句の短文は、短文表現の述部の倒置とも呼びかけ表現の述部の倒置ともとれるが、第二句の終わりの「か」を詠嘆の終助詞(注4)とするならば、まず二句切れが認められる。次に、第三句以下の短文を呼びかけ表現とするなら、第三句は「桜花ヨ。」と口語訳できるから、三句切れも認められる。句切れの認定基準として「文法的に見て句が切れているものだけに句切れを認める」(注1。前出)とするなら、中実構成の判断基準にも同様の立場が肝要となろう。この歌の場合、句切れとして二句切れ・三句切れが、中実構成として「桜花」が、それぞれ認められてしかるべき、と考えられる。

・ いのちはやほなにぞはつゆのあだ物を 三句切れ あふにしかへばをしからな

くに (巻第一二・恋歌二・六一五・どものり*紀友則。筆者注)

(口語訳) 命とは何か。それは露のようにはかないものであるよ。(命ナド) 恋しい人に逢うことと引き換えても惜しくなどないのに。

(説明) 久曾神昇氏(注4)や小沢正夫氏(注5)は、この歌の初句を「命やは」、第二句を「なにぞはつゆの」として口語訳しているが、筆者は、第二句の句切れ「――なに」まで含んで初句扱い、「――そはつゆのあだ物を」までを第二句・三句扱いとして口語訳すべきとした。そうすると、歌の前半では露のように「ハカナイ命」、後半ではあいびきと引き換えても「惜シクナイ命」を「あだ物」と表現したとすれば第三句「あだ物を」は、客観的な態度として「命」を評価したこととなり、中実構成の語句として認められる。

(二) 別表1及び2によれば、①万葉歌の三句切れは句切れ計八三五回中九〇回・11%、うち短文表現四七回・6%、長文表現(述部の倒置)二四回・3%、呼びかけ表現一九回・2%のところ、②古今歌の三句切れは句切れ計四六一回中一六二回・35%、うち短文表現一一六回・25%、長文表現(述部の倒置)三一回・7%、呼びかけ表現一五回・3%とあるので、短文表現の大幅な増加と長文表現、呼びかけ表現の小幅な増加により「増える三句切れ」を実現したことになる。

他方、古今歌の三句切れに含まれる中実構成は一一回・2%に過ぎず、その内訳を表現区分別に見ても、呼びかけ表現で一〇回・2%、短文表現

で一回・0%となる。別の言い方をすれば、古今歌の三句切れにおいては、中実構成を伴うものは表現区分別に見ても極く少数に過ぎず、万葉歌の三句切れから古今歌の三句切れへの増加率 24%のほとんど全てを、中実構成以外の表現技法に因らざるを得なかったことが分かる。繰り返しになるかも知れないが、古今歌の「中実構成十三句切れ」のうち例歌として示したものを除き、余歌全てを類歌として掲げておく。

(三) 古今歌における中実構成十三句切れの類歌(呼びかけ表現七首のみ)

・ ちりぬともかをだにのこせ 二句切れ 梅花 三句切れ こひしき時のおもひでにせ

む (巻第一・春歌上・四八・よみ人知らず)

・ 山たかみ人もすさめぬさくら花 三句切れ いたくなわびそ 四句切れ 我見はやさ

む (巻第一・春歌上・五〇・よみ人知らず)

・ 五月こばなきもふりなむ 二句切れ 郭公 三句切れ まだしきほどのこゑをきか

ばや (巻第三・夏歌・一三八・伊勢)

(口語訳) 五月が来たら鳴き声も古びてしまうだろう。郭公ヨ。まだその時節ではない頃の(新鮮ナ鳴キ) 声を聞きたいものだ。

(説明) この歌の第二句「なきもふりなむ」を「鳴キ声モ古ビテシマウダロウ。」と口語訳したが、「ふりなむ」は動詞(ラ行上二段活用)「古る」

の連用形+完了の助動詞「ぬ」の未然形+助動詞「む」の終止形とみただ、まず二句切れが認められる。上二句は呼びかけ表現の述部が倒置し、かつ、下二句は「郭公ヨ。」を呼びかけの相手(対象)とする呼びかけ

表現とすると、「郭公」は中実構成としてなじみ、かつ、三句切れも認められる。

・ 今さらに山へかへるな 二句切れ 郭公 二句切れ こゑのかぎりはわがやどになけ

(巻第三・夏歌・一五一・よみ人知らず)

・ 露ながらをりてかざさむ 二句切れ きくの花 三句切れ おいせぬ秋のひさしかる

べく(巻第五・秋歌下・二七〇・きのともりの*紀友則。筆者注)

(口語訳) (皆ノ衆ヨ。きくの花ヲ) 露の置いたまま折りとってかざしにしよう。老いることのない(きくの花ノヨウナ) 秋が長く続くように(願ウ)。

(説明) 上三句の呼びかけ表現の中で、「きくの花」は主語ではなく、「折りてかざす」の目的語である。「かざさむ」を四段活用の動詞「かざす」の未然形+推量の助動詞「む」の終止形とすれば二句切れは認められる。下二句の短文表現の主語は「きくの花」ではなく、「古いせぬ秋」であるから、久曾神昇氏(注4・前出)がいう「菊よせて秋といった。」

としても、中実構成とするにはやや共通性に欠けるきらいがある。第三句「きくの花」を「菊の花ヨ。」と呼びかけ表現として認識するならば三句切れも認められるであろう。

・ もろともになきてとどめよ 二句切れ 蚕 三句切れ 秋のわかれはをしくやはあら

ぬ(巻第八・離別歌・三八五・ふぢわらのかねもち*藤原兼茂。筆者

注)

(説明) この歌の上三句は呼びかけ表現の述部が倒置されたもので、まず二句切れが認められる。また、下三句は「蚕ヨ。――やはあらぬ」と、それも呼びかけ表現なので三句切れが認められる。すなわち、二つの呼びかけ表現の相手(対象)が第三句に収まっているので、最も強力な中実構成ということができ、結果として、二句切れ+中実構成+三句切れという珍しい文の構成が成り立つと認められる。

・ しひて行く人をとどめむ 二句切れ 桜花 三句切れ いづれを道と迷ふまでちれ(巻

第八・離別歌・四〇三・よみ人しらず)

おわりに(一応のまとめ)

小沢正夫氏は、『古今和歌集』(注5・前出)の「解説」で、

『古今集』では、歌の主題となる体言が多くの場合、第三句にあり、これを「中実」という(『万葉集』の歌には「上実」が多く、『新古今集』では「下実」が多い。)もっとも、上実・中実・下実ということは、各時代の大体の傾向に過ぎない。と述べておられる。

かつて、筆者も、先行研究「詠歌年代が明らかなる万葉歌、及び古今歌における句の切れと続き」で、両集の和歌(短歌)における句切れの傾向を調べ、古今歌における「減らない二句切れ」、「増える三句切れ」につき詳述したことがある。今回の研究では、古今歌において、二句切れが減らない原因、三句切れが増える原因として、「中実」構成がどうかかわって

いるかに接近したいと考えたところである。

(一) 古今歌における二句切れと中実構成とは相当の強さ(別表2のとおり、二句切れ43%のうち中実構成を伴うもの13%)で因果関係がある。

別表2のとおり、古今歌における二句切れは句切れ計四六一回中一九九回、うち中実構成を伴うもの一九九回中六〇回・43%中13%、13%のうち9%は短文表現とみられ、かつ、中実構成を伴わなかったら、二句切れは1%減少ではすまなかった、とみられる。

(二) 古今歌における三句切れと中実構成とは別表2のとおり三句切れ35%のうち中実構成を伴うもの2%と、因果関係がほとんどない。

別表2のとおり、古今歌における三句切れは句切れ計四六一回中一六二回、うち中実構成を伴うもの一六二回中一一回・35%中2%。そのほとんどを呼びかけ表現が占めている。

古今歌の三句切れ一六二回中一一回・35%中25%を短文表現が占めるものの、中実構成を伴わないから、「三句切れの多くは中実構成以外の原因によってもたらされた」、ということが出来る。それは恐らく、①短文表現(上の句で1短文、下の句で1短文の複文的構造)の重視、②表現区分を問わず主・述の位置の逆転などがその増加につながった、と見られる。

いづれにせよ、古今歌の「減らない二句切れ」には中実構成が関与し、「増える三句切れ」には関与しないことが明らかになった。

これを和歌(短歌)史的に解釈すると、①古今歌の「減らない二句切れ」、
「増える三句切れ」はともに万葉歌から新古今歌への句切れ上の過渡的形
態を示す、②⑦万葉歌の二句切れでは呼びかけ表現・長文表現対短文表現
の割合が7%対37%のところ、古今歌の二句切れでは12%対32%と、
呼びかけ表現・長文表現の重視は指摘できても、短文表現については軽視
の傾向を指摘できるに止まるのではないか。逆に、④万葉歌の三句切れで
は前者対後者の割合が5%対6%のところ、古今歌の三句切れでは10%
対25%↓2倍対4倍へと呼びかけ表現・長文表現の増加傾向はともかく、
短文表現の重視を指摘することに妥当性があるのではないか。さらに、③
古今歌における「三句切れと中実構成」、「中実構成と三句切れ」との関連
(因果関係)でいえば、⑦前者にあつては、二句切れ一九九回中六〇回の
中実構成がなければ「減らない二句切れ」は実現できなかったろうし、④
後者にあつては、三句切れ一六二回中一一回の中実構成がなくても「増え
る三句切れ」は実現できた、と見なされよう。

注 1 犬養寛氏ほか編集『和歌大辞典』(昭和61・3・明治書院・「中実」

(小沢正夫))

2 築瀬一雄氏監修・小林和彦氏著『古典新釈シリーズ⑤古今和歌集』

(1978・9・中道館)

3 山口堯二・鈴木日出男氏編『全訳全解古語辞典』(二〇〇四・一〇・文英堂)

4 久曾神昇氏『古今和歌集(二)』(四)全訳注(一九七九・一〇・講談社)

5 小沢正夫・松田成徳氏校注・訳『古今和歌集』(一九九四・一一・二〇・

小学館)

6 拙稿「和歌(短歌)の表現技法―古今歌の「減らない二句切れ」と「増える

三句切れ」―に関する一考察」(HP『UE J ジャーナル第三五号』・

二〇二一・三・一・全日本大学開放推進機構)

(テキスト)

(1) 万葉歌については、『新編国歌大観』第二巻(昭和59・3・角川書店)の

うち「詠歌年代が明らかかな二〇九五首(土屋文明氏編『萬葉集年表』第二

版・昭和59・3・岩波書店)による。

(2) 古今歌については、『新編国歌大観』第一巻(昭和58・3・角川書店)の

うち墨消歌二一首を除く一〇九一首による。

浅岡 純朗 (あさおか・すみあき) 全日本大学開放推進機構監事)

「和歌(短歌)の表現技法 万葉歌(音声の時代)の枕詞・序詞から
古今歌(文字の時代)の掛詞・縁語への変遷にかかると一考察」

(同前誌、第三十七号、二〇二一年一〇月)

(%は少数1位を4捨5入)

別表1 詠歌年代が明らかな万葉歌及び古今歌における句の切れと続き

区分		句の切れ			句の続き			
		句切れ	構成比 (%)		句切れを除く つなぎ目	構成比 (%)		
句と句のつなぎ目	句の切れ目		①	②		①	②	
万葉歌	初句・第二句	初句切れ	19	2	1	2076	99	
	第二句・第三句	二句切れ	365	44	17	1730	83	
	第三句・第四句	三句切れ	90	11	4	2005	96	
	第四句・第五句	四句切れ	361	43	17	1734	83	
		句切れ計	835	100	10	7545	100	90
		万葉歌数	2095					
		句切れ歌	770					
		無句切れ歌	1325					
古今歌	初句・第二句	初句切れ	20	4	2	1071	98	
	第二句・第三句	二句切れ	199	43	18	892	82	
	第三句・第四句	三句切れ	162	35	15	929	85	
	第四句・第五句	四句切れ	80	18	7	1011	93	
		句切れ計	461	100	11	3903	100	89
		古今歌数	1091					
		句切れ歌	411					
		無句切れ歌	680					

(%は少数1位を4捨5入)

別表2 古今和歌(短歌)における二句切れ・三句切れの成因別増△減と「中実」構成の寄与度の比較

表現区分 (表現句軍の特記事項)		呼びかけ表現	長文表現	短文表現	合計	年代順・時期区分		摘要	
						西暦	和暦		
万葉歌	二句切れ	実数	24	30	311				
		構成比(%)	3	4	37	44			
	三句切れ	実数	19	24	47	90			
		構成比(%)	2	3	6	11			
古今歌	二句切れ	実数	26	27	146	199			
		うち中実構成	9	11	40	60			
		内訳				1	1	760~808	天平宝字4~大同3
			読人しらず	3	5	11	19	809~849	大同4~嘉祥2
			六歌仙	3	2	4	9	850~890	嘉祥3~寛平2
			撰者	3	4	24	31	891~945	寛平3~天慶2
		（構成比）	実数分	6	6	32	43		
			増△減	+3	+2	△5	△1		
	うち中実構成分		2	2	9	13			
	三句切れ	実数	15	31	116	162			
		うち中実構成	10	-	1	11			
		内訳		-	-	-	-	760~808	天平宝字4~大同3
			読人しらず	4	-	-	4	809~849	大同4~嘉祥2
			六歌仙	2	-	-	2	850~890	嘉祥3~寛平2
			撰者	4	-	1	5	891~945	寛平3~天慶2
		（構成比）	実数分	3	7	25	35		
増△減			+1	+4	+19	+24			
うち中実構成分	2		-	0	2				